

Q1-1. 立野ダム建設予定地周辺には活断層が通過していると聞いたことがあります。ダムは造れるのでしょうか。

○ 一般に、断層活動に伴って生じる断層変位によりダム敷^{※1}にズレが生じるとダム築造上支障となるため、ダム敷及びその近傍にダムを建設する上で特に考慮する必要のある第四紀断層^{※2}が存在しないことを確認した上でダムの建設を計画します。

※1 ダム本体が基礎岩盤部分に接しているところ

※2 地質時代の第四紀（約260万年前～現在）に地表に変位を生じたことのある断層

○ 立野ダム建設予定地周辺においても、熊本地震前に、文献調査や地形学的調査、現地踏査などの第四紀断層調査の結果を総合的に勘案して、ダム建設を行う上で特に考慮する必要のある第四紀断層は存在しないと判断していました。

○ また、熊本地震後には、地震前の第四紀断層調査の結果に加え、地震後の状況を対象とした文献調査[※]、地形学的調査、現地踏査及び専門家を交えた詳細な現地調査を新たに実施しました。

※文献調査について後段で詳述

○ その結果、ダム敷及びその近傍では、従来からの知見どおり、活断層と考えられる断層変位は確認されていません。（図-1）

○ 加えて、こうした熊本地震後の建設予定地周辺の第四紀断層調査の結果を含め、関係各分野の第一人者からなる「立野ダム建設に係る技

術委員会」を設け、立野ダム建設に係る技術的な確認・評価を行いました。

- その結果、「熊本地震後もダム敷及びその近傍にダムを建設する上で特に考慮する必要がある第四紀断層は存在しない。したがって、断層変位によってダム敷にズレが生じることはないと考えられる。」との結論を得ています。
- なお、ダム敷に一番近い北向山断層は、布田川・日奈久断層帯の中で最も北東部に位置する断層ですが、地震後の文献調査及び現地踏査の結果、ダム本体の建設予定地から約 500m 離れた位置で、既知の北向山断層に沿って線状に活断層の可能性がある亀裂を確認しており、その亀裂は立野ダム建設予定地近傍へは向かう方向ではないことを確認しています。(図－１)

(文献断層について) (図－２)

- 「新編 日本の活断層」「九州の活構造」等の大学・研究機関等の発表している文献で活断層の可能性があるとしてされている断層を「文献断層」と言います。
- 立野ダムでは、抽出した文献断層のうち、ダム敷及びその近傍に向かう可能性がある文献断層 19, 21, 25 を対象に現地踏査を実施しました。
- 文献断層 19 については、周辺の現地踏査を実施した結果、文献断層のダム側の延長線上にある火砕流堆積物の露頭^{*}に活断層は確認さ

れませんでした。また、道路や護岸等にも活断層による変状は確認されませんでした。

※岩石や地層が露出している場所

○ 文献断層 2 1 については、周辺の現地踏査を実施した結果、法面の崩落は確認されましたが、道路に活断層による変状は確認されませんでした。

○ 文献断層 2 5 については、北端として示されている白川左岸の岩盤露頭や周辺の連続露頭を調査した結果、活断層による変位地形や、活断層と考えられる露頭は確認されませんでした。また、ダム敷及びその近傍の地層にも活断層によると考えられる変位はなく、白川右岸側の構造物に変状も確認されないことから、ダム敷及びその近傍まで連続しないことを確認しています。

○ 詳しい資料については [こちら](#) に掲載しています。

○ 平成 2 9 年 1 0 月 3 1 日に公表された、2 万 5 千分 1 活断層図「阿蘇」を踏まえた、立野ダム建設にかかる技術的な確認・評価については、[こちら](#) に掲載しています。

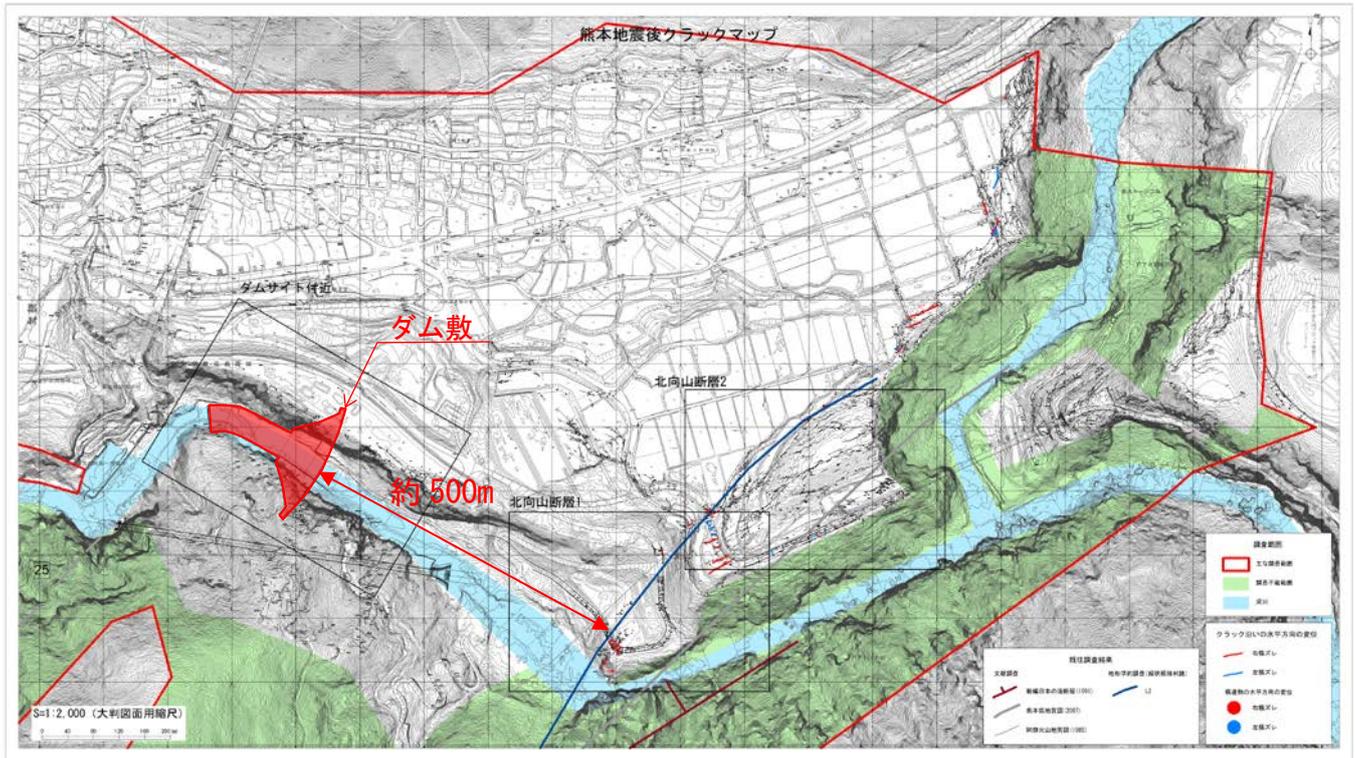


図-1 熊本地震後の現地踏査による亀裂調査結果

※出典：立野ダム建設に係る技術委員会 報告書に加筆

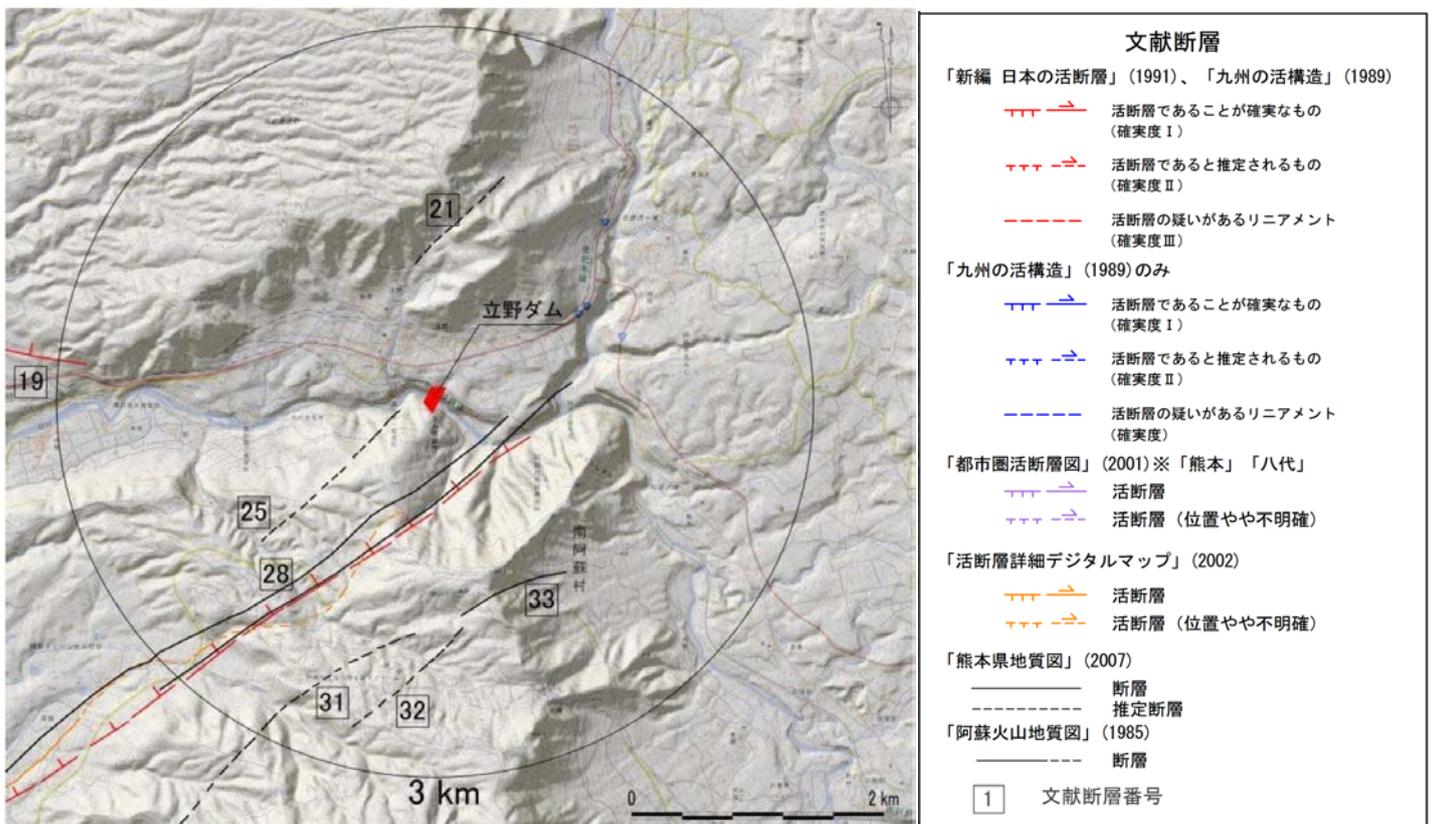


図-2 文献断層位置図